日本地震工学会論文集　第 11 巻、第 5 号（特集号）、2011

2008 年岩手・宮城内陸地震の際に宮城県仙北平野で観測されたやや長周期地震動の特徴

片岡俊一 [1)]

1)正会員　弘前大学大学院理工学研究科、准教授　博士（工学）
e-mail: kataoka@cc.hirosaki-u.ac.jp

要約

2008 年岩手・宮城内陸地震の際に、宮城県仙北平野で観測された地震動はやや長周期帯域の成分に富んだものであった。この論文では、まずこの周期帯域における地震動強さは既往最大程度であることを示した。ついで今回の地震動は平野の地下構造を反映した盆地生成表面波で構成されている可能性が高いことを次の事柄の検討を通して示した。つまり、表面波の現れる時刻が S 波直後であること、卓越振動数が過去の地震と今回のもので同一であること、水平面の粒子軌跡が震央直交方向を向かないことである。

キーワード：　*Love 波*、*Rayleigh 波*、*粒子軌跡*、*伝播方向*